

## 海外シリーズ②⑩ (1)

### 英国留学体験記

#### 弓 取 修 二

「どこでもいいから早く降りたい！」意気揚々と到着するはずが、全く散々な状態でロンドンヒースロー空港に降り立ったのは1992年1月7日でした。体調が優れず、乱気流のため不覚にも酔ってしまったのです。私の留学生活はこんな調子でスタートしました。

海外留学を希望した理由はいくつかあります。例えば、最先端技術の修得、語学力の向上等々です。しかし正直なところ、一度は海外で暮らしてみたいというのが一番の理由でした。海外でのプラント建設もいいなと思って入社したところが、研究所に配属されて5年目。やはり一度は海外へという思いが益々強くなっていた時、海外留学制度が目に入り気軽に応募してみたのです。書類選考を経て筆記、面接と久しぶりの試験を何とかクリアし、晴れて留学の許可を得たわけです。

#### ◇シェフィールドへ・・・

シェフィールドはロンドンの北北西、約250kmにある人口50万人程の都市で、イギリスにおける鉄鋼業発祥の地として有名です。市の西部には国立公園が広がっており、北イングランドの特有の美しい風景を堪能することができます。

しかし、到着早々、研究テーマに関するディスカッションや実験準備、生活する為の準備に忙しく、風景を楽しむ余裕などありません。家探しから銀行の口座開設、自動車のリース契約等々、英国生活の基礎知識を持たない私には、相手の言うことがなかなか理解できず、かなり疲れることば

かりでした。大学では結構通用すると思えた英語も、市中ではなかなか思うように通じなかったのは少なからずショックでしたが、“まあこんなもんか”と開き直り、怪しげな英語を操っていました。多少英語は変でも、伝えようとする気があれば何とかするのは本当ですが、どうしてもできない場合も実際ありますので、そんな時は大学の同じ外国人留学生に頼むのが一番です。

#### ◇交渉は疲れる！

研究をする上でも、生活する上でも、種々の場面で交渉の必要性が出てくると思います。言わなくても解ってくれる日本では、控え目な言動、相手の立場を配慮した言動が好まれますが、外国では理解されません。自分の思っていることを主張し、相手に認めさせることができるか否かは極めて重要な問題です。黙っているのは相手の言動に賛成していると受けとられてもしかたありません。不当な言動であれば、率直に反論すればいいのです。生来、文句言いの私は、イギリスでも結構文句を言っていました。

例えば、こんなことがありました。シェフィールドに来て2ヵ月が経った頃、私の住んでいたアパートの階下に泥棒が入りました。家人が居たにもかかわらず、窓を丸太で壊して侵入しており悪質でした。警察が言うにはこのアパートの周囲は暗すぎるため、以前から目を付けられていたらしいとのこと。周囲に街灯を付けて敷地を明るくして自衛しなければ、また狙われる恐れがあるから十分注意するようにと言いつつ残して帰って行きました。家族の渡英を間近に控え、黙って聞いてはられません。大学の所有のアパートだったので、早速、大学の担当窓口に相談に行きました。しかし、まったく相手にされません。マネージャーにも直談判を試みましたが、やはり返事はNo。予算がないの一点張りでなかなか要求を受け入れて

(株)神戸製鋼所技術開発部化学高分子研究所勤務

1992年1月～1993年4月

英国シェフィールド大学に客員研究員として留学

(昭和58年('83年)応用化学科卒・新33回)

(昭和60年('85年)大学院博士前期課程修了)

くれません。そこでこれぞ最終兵器とばかりに、アパートの住民のサインの入った要望書と、これまでの交渉の経緯や警察からのコメントと共に、再度このような損害が生じたら大学側の責任も追求する旨の手紙を提出し、どうすることが得策か再考を要請しました。これが非常に効果的で、先方は急に態度を軟化させ、一転して要求の全面履行を約束してくれました。最初の手紙を出してから既に約3か月間近くが過ぎていました。英語での交渉は非常にもどかしく、また疲労感を伴い、何度止めようと思ったか知れません。しかし、単に疲れるからとか、どうせ帰国するから、という理由で、相手の言うなりになるのはいやでした。結局、アパートの全周には、8個もの街灯が取り付けられ、その周辺でも敷地が最も明るいアパートとなっていました。もちろん、泥棒騒ぎは以後全くありませんでしたし、アパートの住民達からも感謝されたことは言うに及びません。研究成果より、もっと実質的に人の役に立った成果はもしかするとこれだったかもしれません。

#### ◇研究生生活での思い出

一番思い出されるのは、研究が一番苦しかった時期のことです。渡英して約5か月が過ぎようとしていた頃、予備実験も順調に終了し、いよいよ本格的な実験に入ろうとしていました。ところが、実験は予想以上に難しく、当初考えていた幾つかの方法ではうまくいきません。ToF-SIMS（時間飛行型二次イオン質量分析法）による分析を先



行させようと思いましたが、これも運悪く壊れてしまい修理に数ヶ月を要することがわかりました。この分析装置は最先端のものであり、そうそうどこにでもあるものではありません。不運のダブルパンチに、一時はテーマの変更も考えました。しかし、結局、残された時間と、失敗した時の状況におののきながらも、方針を変更せず何とか解決する道を選びました。夜遅くまで実験室に籠り、約2か月間の試行錯誤の末、漸く解決策を見出すことができた時は本当にほっとしました。結果的にまずまずと納得できる成果を得て帰国できましたが、今でも苦しかったその時期を思い出すと冷や汗の出る思いがします。

#### ◇余暇の過ごし方

イギリスには身近な所に色々な観光地や史跡がありますから、ほとんどの週末は、スコットランドから南ウェールズに至るまで、車であちこちを旅行していました。まとまった休暇には、フランス、ベルギー、ルクセンブルグ、スイス、ドイツやカナリヤ諸島へも足を伸ばしました。とにかく旅行費用が日本と異なりかなり安いからです、十分に海外旅行を楽しめました。当然イギリス人と一緒にツアーに入りますから、例えば、イギリス人を通してのフランス、フランス人観を垣間見ることもでき非常に興味深い経験をすることができました。

#### ◇おわりに

あれこれと思い付くままに書かせて戴きました。外国での研究は確かに大変です。特に、一定期間で何らかの成果を出さねばならぬ場合は、精神的な苦勞も多いと思います。しかし、海外での生活は楽しいことも非常に多く、この辺で十分精神的なバランスがとれるように思います。

苦勞が多かった分、楽しかったことも多かった1年3か月でしたが、会社や教授、友人達から物心両面での支援を受け、自分の納得できる成果を得て帰国することができたことを、非常に幸せであったと感じています。また、研究面での成果もさることながら、あのような状況下でも何とかやってこれたという自信を持てたことは、何にも変え難い成果であったように思います。